日本と台湾の互助慣行の比較

流通経済大学　恩田守雄

１．目的

本報告の目的は、田植えなどの労力交換のユイ（互酬的行為）、道路補修などの共同作業や共有地（コモンズ）の維持管理のモヤイ（再分配的行為）、冠婚葬祭のテツダイ（支援＜援助＞的行為）という日本の互助行為について（恩田,2006）、台湾と比較し相違点と類似点を明らかにすることである。それは東アジア的な互助ネットワークの可能性について考察することでもある。

２．方法

上記の目的を達成するため日本と台湾の互助関連の文献を参照し、台湾で現地調査を実施した。調査地点は 2013 年 9 月に台南市（台湾人）、台南縣海端鄉（台湾人、ブヌン族）、花蓮縣玉里鎮（アミ族）、宜蘭縣蘇澳鎮（台湾人）、新竹縣新埔鎮（台湾人）、桃園縣新屋鄉（台湾人）の 11 箇所、2014 年 3 月に膨湖縣西嶼鄉（台湾人）、台東縣蘭嶼鄉（ヤミ族）、台東縣緑島鄉（台湾人）の 9 箇所で古老中心に地元住民から聞き取り（半構造化インタビュー）調査を行った。なお台湾の互助慣行の先行研究は韓国に比べ少ない（第 95 回日本社会学会報告「日本と韓国の互助慣行の比較」2012 年）。

３．結果

台湾の互助慣行は日本同様近代化の過程で衰退しつつあるが、農村や島嶼地域ではまだ伝統的な互助行為が見られる。特に親戚関係という血縁の系譜を軸にしながら、地縁関係でも強固な互助ネットワークが存続している。日本のユイに相当する「換工」は中国大陸で多く見られる言葉だが、一部農業で言われたものの、手作業の稲刈りでは「幫忙」（パンマン）が使われている。島嶼地域の漁村では都市化されていない事情もあるが、伝統的な互助慣行によるつながりや絆が健在である。モヤイでは共同作業は「志工」（ボランティア）でするため、また共有地（コモンズ）自体が存在しないこともあり、全体として住民総出の作業は少ない。しかし原住民の地域社会では道路清掃を月 1 回共同でするなど、災害時を含め団結力が強い。共同作業に参加しないと過怠金が科されるのは日本も同じだが、地域活動を通して民族間（台湾人と原住民）の融和をはかっているところもある。金銭モヤイは友達や隣人、親戚でする「標會」（互助會）が台湾本島で多く見られ原住民もする。しかし離島では台湾人は本島同様行うが、原住民でする者はほとんどいない。本島の原住民の中には伝統的な金銭的支援としての頼母子という日本語を知っている者がいた。今も見られる日本の頼母子が親睦や利殖目的に変わってきた点は台湾も共通する。テツダイでは「幫忙」の言葉で葬式や結婚式の手助けをするが、互助ビジネスに任せることが多いのは日本と同じである。なお日本語の加勢（カセイ）という言葉を使う地域があり、頼母子同様日本統治時代の残滓が散見される。

４．結論

日台両国を比較すると、台湾では離島を別にして中国同様個人主義的で互助ネットワークは日本ほど強固とは言えない面もあるが、原住民間では共同作業を通して強い一体感が見られる。また日本の頼母子や加勢と同じ言葉を使う地域があるなど「互助慣行の移入説」も否定できない。こうした知見を踏まえ、東アジアに通底する互助慣行の構造を解明することが今後の課題である。

＜科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）＞　平成 23 年度～ 26 年度　基盤研究 C
研究課題「互助ネットワークの民俗社会学的国際比較研究」（課題番号 23530679）
研究代表者（一人の研究）恩田守雄

＜参考文献＞

恩田守雄、2006『互助社会論』世界思想社。

Onda, Morio. 2013.‘Mutual help networks and social transformation in Japan,’*American Journal of Economics and Sociology*,71(3):531-564.